

12
28

東 京 圖 書 館

和 書 門

小 說 類

二 六 函

七 架

七 八 號

七 五 冊

繪本通俗三國志

八 編

五





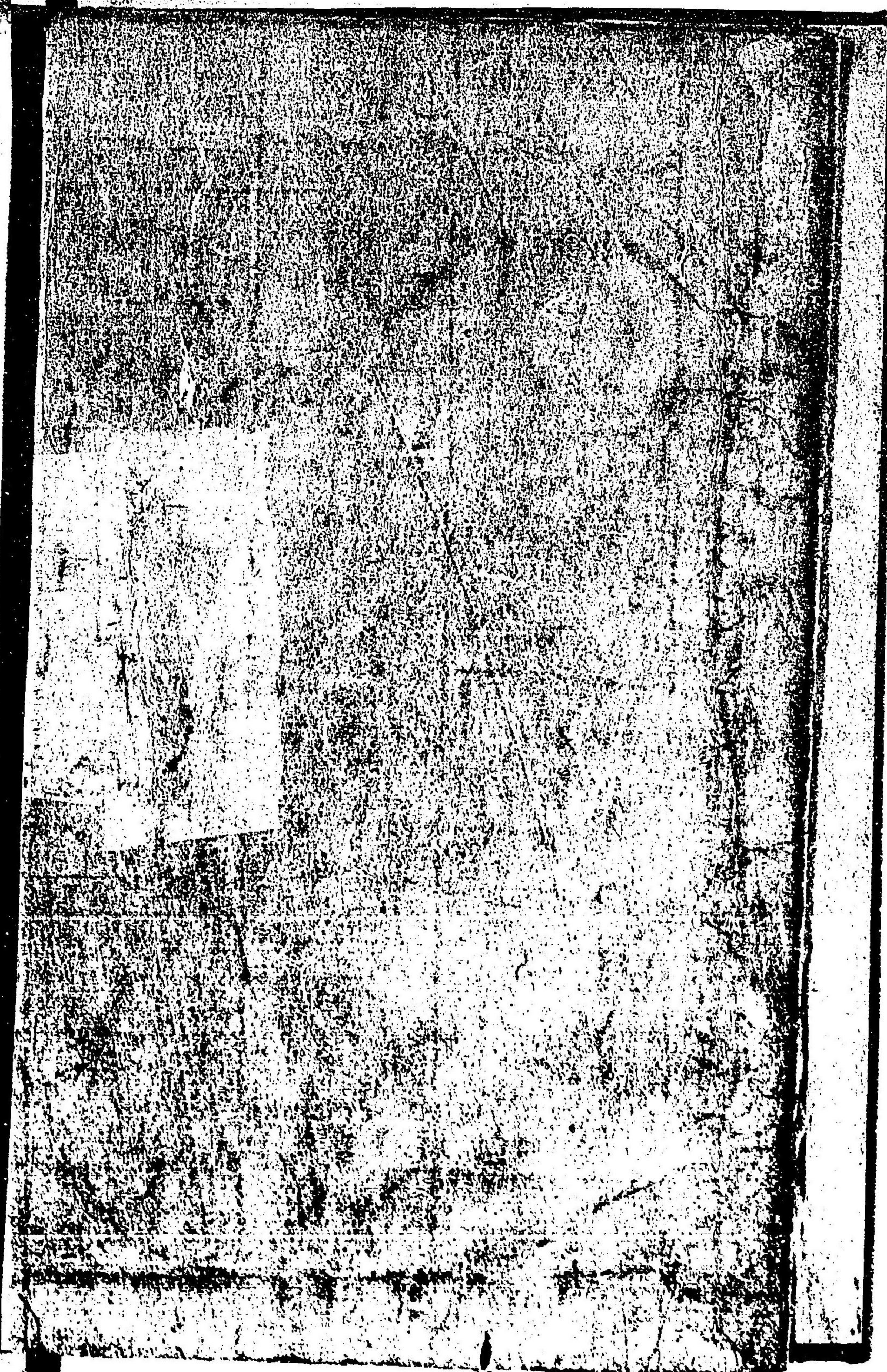
繪本通俗三國志八編卷之五

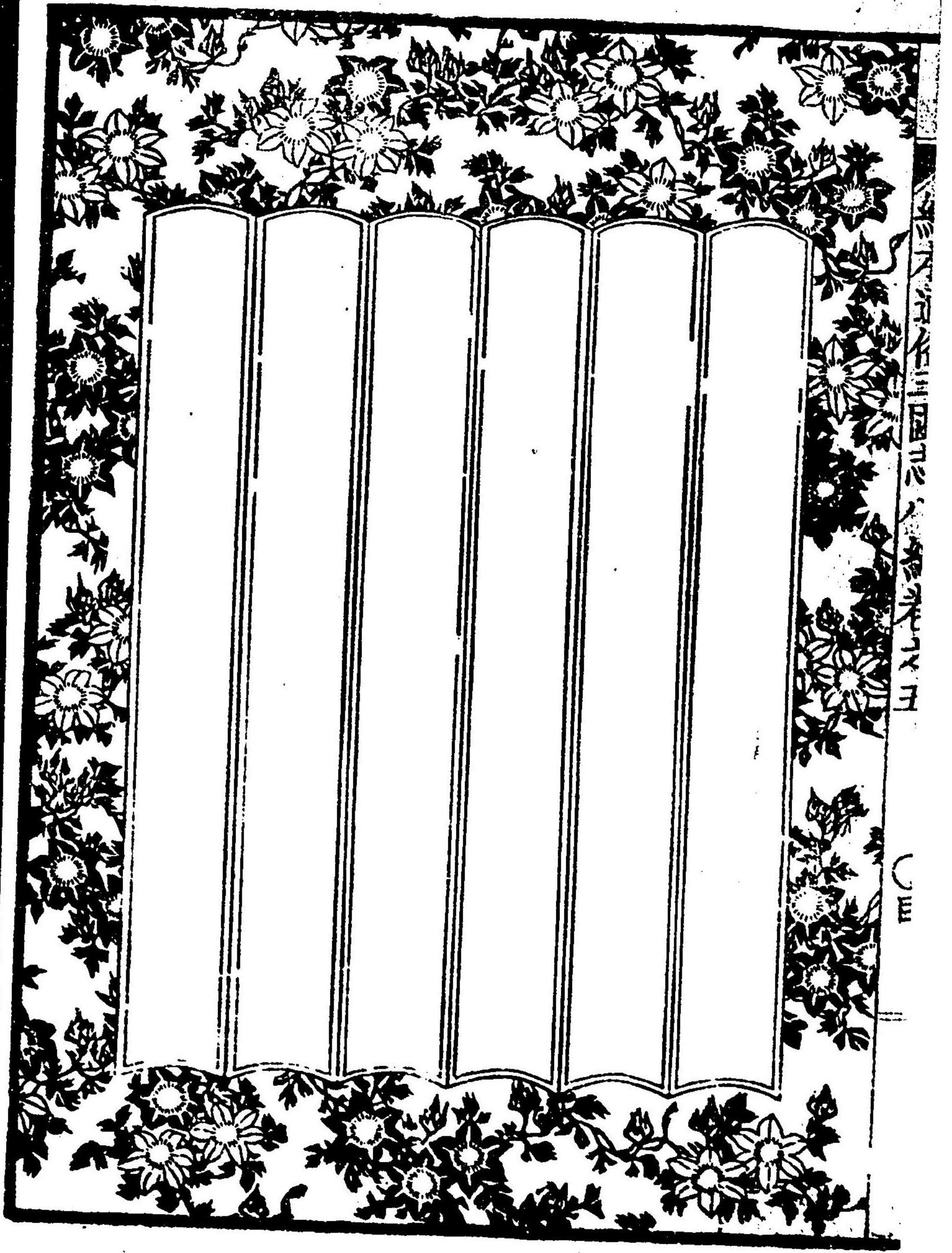
目錄 明治十年交換

司馬炎築受禪臺

羊祜病中薦杜預

王濬計取石頭城





繪本通俗三國志八篇卷之五

司馬炎築受禪臺

魏主曹奂景元五年で改めて咸熙と号して春三月吳の大將軍丁奉蜀と救んとて五万の勢よて攻上りける蜀こゝに滅びて劉禪魏に降りぬとす。蜀は半途より引回すとて、とてきて吳の中書丞華覈といふもの吳主孫休に申けり。吳と蜀との唇齒の國なり。蜀を破して劉禪降れり。臣はとてやめてこの内をあらへど安らからば陛下も定めざる哀と悼とものへん推量とるよ。司馬昭もあらば魏の天下を奪て後大軍を起して吳を攻めんとす。陛下諸君守の勢を添て深く用心しなす。孫休はよもとして陸遜が子陸抗

繪本通俗三國志八篇卷之五

と鎮東大將軍として。川口と守らせ左將軍孫異は南
 徐の口と守らせ江の辺に板百の庫屋を造り大將軍
 丁奉は守らせ用心をばひくこと入りる爰は蜀の建寧の
 太守霍玄といふもの建寧の城は在て成都の破たる由を
 きて卒に素服して西の方とのぞき三日の間哭きしむる手下
 の大將きたり告て曰く。今成都破して天子已に降人となり
 り此の誰が為と城と守りしを速に魏に降せ霍玄
 涙をたふがして中るる遠路相隔て主上の存亡の事
 由降参と受て主上と重んぜ我亦も尽く降せん方
 一主上と軽んじて辱むる我々の城を枕として討死せん先
 成都の様と委しくすまで此城を生くならむと諸人との

忠義を感ずると牙を咬で相待る日を経て人入り
 天子とて魏に降りしむる洛陽へ送上せて魏主は
 見下むと告るる霍玄は怒り兵を起して追蒐ん
 と義を諸人諫て曰く蜀とて滅びて君とて人は
 志に魏に降て身を保ん霍玄已とて得ざりて是に従
 ひ洛陽へ表を上せて魏に降らんとて望む此と劉禪
 とて洛陽へ上りて魏主曹奐を見殿階の下に拜伏し
 る且つ司馬昭責て申しらるる汝荒淫無道にして國の政
 と乱るるの罪誅せざんば叶はし劉禪怖れ戦き顔色土
 のどくちろりしむる魏の群臣とて曰く彼まこと罪ありて
 せざる幸ふと降せり其命をとりを扶けんとたり

臣奏して蜀の建寧と守る霍戈との人の表を上りるを
報トルと云ふ乃ち披きこえるよとの表と曰く。

漢建寧太守霍戈率六部將守上表曰臣聞人生
於三事之如一惟難所在則致其命今臣國敗主
附守死無所是以委質不敢有貳

司馬昭見了りて大に嘆ト罵又此のとき忠義の人ありと
て霍戈を旧の官に復し劉禪が罪を宥して安樂公に封
ト住宅と与て絹一万疋奴婢百人を賜ひ其子劉瑤を
らびに樊建誰周卻正ホをへく侯爵に封ト黃皓が讒
佞にして國を乱りしと憎んで卒に市に生じて首をさら
しむ次の日劉禪みぐる司馬昭が家に行て昨日の恩を

謝しルと云ふ司馬昭酒宴を設けて重くおもはし樂人を命じ
て魏國の樂を奏せしむ蜀の懿臣をよそとて哭て入る涙を
まじりて劉禪へ笑ひ嬉んで酒を飲酒宴半に及ぶ司
馬昭又ひそそ樂人を命じて蜀の樂を奏せしむる蜀
の懿臣はよく涙を咽んで哀を哭く只劉禪へ少くも哀し
やる色なく笑ひ嬉じて初の日に司馬昭蜀の懿臣をひらいて
やうる人の無情なるべうをどうも有のう假令孔明が再び
来るとも扶け救と能く況んや姜維が分としくいふをう
まの愚人を扶くべきとて又劉禪に問て曰く汝はよ本國
と恋しくおのへう劉禪答て曰く此間真ある酒宴よあを
某さるんぞ本國を慕ん志づらうあつて劉禪坐席を起衣を

司馬昭
劉禪
酒宴の
席にて
蜀樂を
奏せ



其二



樂女

樂女

源氏物語卷之八

樂女



源氏物語卷之八

更んとて生るるに、卻正も志たぐひ来り。何故に本國を慕へ
ざらむ。いひのよぞ、尙重て問ひ、必き御涙を垂して、某が父の
墓遠く蜀の國にあり。此の父は西を望んで、心哀し日夜あり。
とどのよと、いひ、たゞ答へ、然とたへ、司馬公うまらば、省して蜀
へ、回し、のん、と私語るるに、劉禪を覺て、又坐席に坐酒を
けち、へ、よ、と、少く酔ひ、ると、た、司馬昭、問て、や、り、る、へ、汝、が、ま、る、本
國、を、回、ら、ん、と、あ、り、る、う、劉、禪、を、あ、ら、ち、り、卻、正、が、教、た、る、言、を、陳、て、
泣、ん、と、さ、さ、さ、と、も、涙、止、ま、さ、な、ら、ぬ、目、を、塞、で、顔、を、皺、ち、る、る、に、
司、馬、昭、が、白、く、と、れ、の、卻、正、が、教、た、る、言、を、う、り、う、劉、禪、を、ど、ろ、ろ、ひ、て、目、を
開、き、真、に、尊、命、の、下、と、い、ひ、と、答、へ、る、に、
滿、坐、と、ま、た、へ、笑、ひ、司、馬、昭、と、い、ふ、り、
劉、禪、が、詐、ち、く、愚、痴、な、る、と、き、り、て、更、に、疑、と、あ、る

り、り、浩、く、と、司、馬、昭、が、權、柄、天、下、を、震、て、ま、ら、び、く、ぬ、草、木、も
ち、く、魏、主、曹、英、の、名、の、天、子、と、い、ふ、ど、の、皆、司、馬、昭、が、料、を、
受、て、い、の、も、心、を、委、ま、さ、し、は、是、を、う、り、て、群、臣、尽、く、司、馬、昭、を
か、し、て、晋、王、と、稱、し、り、る、に、司、馬、昭、を、あ、ら、ち、父、の、司、馬、懿、を、
謚、し、て、宣、王、と、号、し、り、兄、の、司、馬、師、を、景、王、と、号、を、元、来、女
房、王、氏、の、王、肅、が、女、を、り、二、人、の、子、を、生、で、兄、を、司、馬、炎、と、
す、も、人、物、魁、偉、と、い、へ、垂、た、る、髮、地、に、及、び、左、右、の、手、膝、を、
た、ぐ、其、聰、明、英、武、な、る、方、も、か、人、の、上、に、出、た、り、弟、を、司、馬、攸、
と、や、り、生、と、付、温、和、と、い、へ、恭、儉、孝、弟、な、り、司、馬、昭、常、に、司、
馬、攸、を、愛、し、て、兄、の、司、馬、師、が、家、を、継、ぎ、や、平、生、人、と、語、り、天、下、
へ、い、ふ、に、
兄、の、天、下、を、う、り、と、い、ひ、が、晋、王、と、あ、る、に、及、ん、で、す、と、い

司馬昭の傳

兄の家を継ぐ。たまたま司馬攸を以て世子と立んと。山濤諫て。中尉の兄を廢て。弟を立て。立るの礼を違て。不吉之賈充。何曾。裴秀。亦も深く諫て。中尉の長子司馬炎へ。神武英才。まこと超世の人表あり。天下を治むるを望む。人臣乃相。よあらば。司馬昭を以て心を決せざらん。世子の事。定らざらん。と。大尉王祥。司空荀顛。諫て曰く。古より兄を以て弟を立て。國を滅ぶるの政。志らば。必を深く慮む。司馬昭を以て。因て司馬炎を立て。世子と。中撫軍の職を任む。群臣。喜ぶ。中比。襄武縣。晝の午の刻。天より怪き人下り。身の長二丈あり。よく。脚跡を以て。三三寸。髮。雪の如く。よく。長き髯。蒼く。黄ちる。單の衣を被て。奇。げなる頭

巾を以て。まき。藜の杖を携て。我へて。ある。民の王なり。今。未。以て。汝。ホ。告。知。も。天下。換。主。立。所。見。太平。ぞ。と。よ。以て。三日。の間。市の。辺。て。往。来。し。る。が。勿。心。然。と。して。行。方。る。成。たり。是。晋。王。の。奇。瑞。也。應。ぜ。り。早。く。十二。旒。の。冠。を。被。て。天子。の。位。に。即。ぐ。と。さ。ら。も。司。馬。昭。大。に。喜。び。退。ひ。て。宮。中。へ。入。る。が。卒。に。中。風。の。疾。を。受。て。口。を。開。く。と。能。む。太。尉。王。祥。司。徒。何。曾。司。馬。荀。顛。亦。と。召。て。手。を。以。司。馬。炎。を。指。し。たり。又。ち。命。終。り。時。は。八月。辛。卯。の。日。なり。何。曾。が。曰。く。天下。の。大。事。も。晋。王。に。あり。と。して。司。馬。炎。を。扶。けて。晋。王。の。位。に。上。せ。藜。の。礼。了。て。父。を。文。王。と。謚。す。司。馬。炎。父。の。業。を。継。て。何。曾。を。晋。の。丞。相。と。司。馬。望。を。司。徒。と。石。苞。を。驃。騎。將。軍。と。し。

陳寔と車騎將軍との或曰賈充裴秀二人をりて。し
 りる昔曹操の天命在吾吾其為周文王と。之りし
 きく。此事をよめてある賈充答て曰曹操世々漢乃
 祿て食て人の又逆の賊ありし。呼んてと拍して此言を出
 せり果して其子曹丕がとれ。卒漢の天下を奪り司馬
 炎が曰く。父を曹操と比せば。人賈充が曰く。先君魏を
 助けて己の三世ちんぞ曹操と同ドくらん。司馬炎問て曰
 いうちのめんど賈充が曰く。曹操が功のたつる華夏を蓋と之
 ども下民その威を拍してその徳を懐き曹丕帝位に即て
 徭役まへめて重く人民四方に驅馳して。是時由安くらざり
 宣王景王となり大功を立て恩徳を施しむ。ひ。也。

天下を魏の心を服せり。文王又魏の為に危きと扶け暴
 を除きぬ。ひて功が世を蓋さる。よす。晋王の位をほめ
 り。豈曹操と曰と同ドく。と結らんや。司馬炎喜んで曰
 く。曹丕だも漢の統て継。よ。ちんぞ魏の統て継ざらん。
 賈充再拜して曰く。主上まさ。曹丕が漢の禪を受たる例
 又敷い復受禪臺と造て。あ。ま。魏の統て継皇帝の
 位に即て天下の人。志。ら。司馬炎。志。か。ひ
 次の日劍を佩て殿に上る。魏主曹奐いと。床と下てむ
 久。司馬炎高坐して問て曰く。魏の天下の誰力を曹
 奐答て曰く。晋王父祖の賜あり。司馬炎笑ひて曰く。我
 陛下をえる。文の道と論。を。武の邦と経る。と

あはるば何ぞ才徳あま人を扱で位を禪もへざる曹爽
大に驚愕して口を開くと能くしるる倍もあつる。黄門侍
郎張節怒てやうるへ晋王の言をちるる差り昔一魏の武
帝東西に蕩除し南北に征討して容易に得ぬる天下
よあらば今上の天子徳ありて罪なき何ぞ他人に譲ふ
べき。司馬炎勃然として曰く此天下の元より漢の天下
あり曹操丞相とありては安ん逆威を専ら。自ら魏
王と称して卒に漢の天下を奪り我父祖三世魏を扶
けて天下を一統したる曹氏のカよあらば皆自ら司馬氏
のカあり四海をくさして志を我ちるるぞ魏の天下を受さ
るべき張節大音あげて然となく汝まとは國を奪逆賊

ありとよがりしるる司馬炎はよく怒り張節を治して
首を刎させ我漢の為に本を報を何の不可あることあらん
といひ自ら曹爽涙をあらがして哀を告るとよどの司馬炎
きうよ起て生去り曹爽左右を顧り事をせよ逼り
いせん問を自ら賈充が曰く魏の天數をせよ尽たり。陸
下いよあがりやれとも今叶へくは只晋王の心は逆れをも
漢の献帝の例を帯て受禪臺を造り明ら大礼を具
て位を晋王に禪め人然るとなへ上天心に従ひ下人情を合
て。陛下無虞の禍を免るる。魏主曹爽やむとを得
むしてまよひに従ひ賈充は命して受禪臺をきりし。十三
月甲子の日と扱んで文武の百官してかくめり傳國の王

空と捧げて司馬炎も禪りしむるに司馬炎壇の上にて大
礼を具へ曹奂と其臺より下り公服を被て臣下の列に著
しむとた曹奂諸人告げてやれり漢の建安二十五年
魏漢の禪を受け今に至るまで四十五年を経たり天
の祿を盡し終て天命又晋あり司馬氏の功德天地
弥綸し四海益る正魏の統を継ぐ帝位即べし
曹奂を封じて陳留王とて行て金墉城を守り都を遷
るしと云れと云ふに曹奂涙をちりて去り司馬字こ
れを以て大に哭き曹奂が前より拜伏して臣が死する日まこと
大魏の純臣なりといひしに司馬炎の忠を憐しむる
平王の太宰に封じしむるも司馬字さるる受む此日文武

の百官とて一カ歳を呼んで再拜し大禮を盡し畢るに司馬
炎因て大晋と号して太始元年とあらたむ天下大赦を
行て諫を納る官を置すとより大に治り之の民を安堵
の思ひをちりしむる乃ち祖父司馬懿を宣帝と益し伯
父司馬師を景帝とす父司馬昭を文帝とす七廟を
建て先祖を耀も七廟の漢の征西將軍司馬鈞の子
預章の太守司馬亮の子穎川の太守司馬儁の子
京兆の尹司馬防の子宣帝司馬懿の子景帝司馬
師の弟文帝司馬昭の子大禮を盡く定りしむる毎日朝を
設けて吳と伐の計を相議しむる。

羊祜病中薦社預

會大員三國志八卷第六

呉の永安七年吳主孫休病_レ伏_レ己_レ危_クある_レを
丞相濮陽眞_レ太子孫_レ暉_ヲ托_{シテ}忽_チ命_ヲ終_ス是
と_レ蜀_ノ滅_ビたる_ニ對_{シテ}吳_ノ軍_民震_ヒ悔_ミる_ニ抗_シ軍
ち_レ孫_レ暉_年幼_シて國_ヲ治_ルる_ニめ_タハ_レト_{シテ}左_レ典_軍
萬_或左_レ將_軍張_布と_モ朱_{太后}奏_{シテ}烏_程侯_孫皓
と_立て君_トと_モ命_ヲ由_ヤせ_ト朱_{太后}の_由て_又て我_ハ年
老_タる_ニ寡_婦あり_テ社_稷の_大事_ハ朝_廷の_大臣_ヨリ_ク議
せ_よとい_ハれ_ルニ_ハ濮_陽眞_卒孫_皓と_モ君_トと_モ孫_皓
字_ハ元_宗孫_權が_太子_孫和_が子_{あり}秋_七月_皇帝_の位
に_即て元_眞元_年と_めら_レた_ニ孫_暉を_豫章_王に_封ト_父
孫_和を_文帝_と益_一丁_奉と_大司_馬に_封ト_次の_年と_シ

改_元して甘_露と_号を_吳の_群臣_と孫_皓を_賢才_{あり}
と_て天_子と_志る_ニ案_案に_相違_ハして位_ヲ得_テより_日夜_酒
色_ニ溺_ルと_惡虐_日く_長ト_て民_の禍_ヲを_ちル_ニハ_レ丞相
濮_陽眞_左將_軍張_布二_人と_を練_テ却_テ三_族を_滅た_ス
る_ニ浩_ルニ_ハ群_臣い_よく_始と_て再_ビ練_ルもの_ニ孫_皓心
の_凶暴_と發_シて_又宝_鼎元_年と_改め_陸凱_萬或_を左_右
の_丞相_に任_ト昭_明宮_と造_テ國_の費_民の_哭ま_甚し_クり_け
れ_ハ陸_凱上_疏して_練て_曰く_。

今_無災_而民_命盡_無為_而國_財空_臣竊_痛之_昔漢
室_既衰_三家_鼎立_今曹_劉失_道比_皆為_晉有_此日
前_之明_驗也_臣愚_但為_陸下_惜國家_耳武_昌土_地

總の襄武縣
天より異人下て
天下太平を示と

民王



險瘠非王者之都且童謡曰寧飲建康水不食武昌魚寧還建康死不止武昌居此足明民心與天意也今國無一年之蓄有露根之漸官吏為苛擾莫之或恤太帝時後宮不滿百景帝以來乃有千數此耗財之甚者也又左右皆非其人群黨相挾害也德賢此皆蠹政病民者也願陛下省百役罷苛擾科出宮女清選百官則天悅民附而國安矣

孫皓也。心の内、怒るほどの。陸凱へ先朝の舊臣あるを以て。敢て色々のあつた。或とたつ者尚廣といふゆゑ。天下の吉凶を占ひせらるべし。尚廣が曰く。陛下

の兆をみるべし。上曰く。庚子の歳、青蓋をもちて洛陽に入ぬ。孫皓大に喜び、中書丞華覈とせりて。先帝の時、卿江の辺に多の陣屋を造りて。丁奉の軍とせり。朕は、大軍を起して、洛陽を攻めんとす。天下を一統して、劉禪が為に讎を報ぜん。とあり。華覈諫て曰く。臣、大きく成都滅びて、蜀主降り。司馬炎、魏をみて、新に業を立てたり。と必む。天下の大軍を興して、吳と取の意あらん。陛下は、徳を修て、民心を懐け、要害を固く守て、敵を拒の備とせり。今、輕く兵を起さば、麻の衣と被て、火と滅んとせらるべし。と必む。自ら禁人、陛下よく察し、孫皓怒て曰く。朕時、乗じて天下を

んととき汝いんぞ浩る不吉の言と吐生せる。若先朝乃舊
臣よあらざんば首と斬て法と正せざんとして。門外よあひ立
る。是は華西敷大の嘆息一可惜錦繡江山不久属他人と
いひて。此より德道して世よ生を。吳主孫皓卒よ群臣の諫
て用ひを鎮東將軍陸抗と大將として。川口より荆及
襄陽と伺ひ。晋帝よの由とすて百官とあひめて宣ひ
る。先帝蜀と平げゆ。介とた鄧艾流よ志たがめて吳と
攻んと義と。然ども先帝よとて用ひを彼が惡虐を積
で自滅と。一挙と事と濟んといひ。今却めて荆
及て侵と。いんとして破る。司空賈充が曰く。吳主孫皓無
道よして政を治む。上下尽く怨みとむ。陛下いぬ。荆及乃

都督羊祜よ命と。是と拒が。吳の国よ内変あふと
待て。勢ひよ乘て攻む。一鼓して定らん。晋帝よとて
從ひ。急ぎ勅命と傳て。羊祜よ敵を拒せらる。羊祜
字の叔子。いと泰山南城の人あり。此とた襄陽を守り
軍民との徳よ。懐く常よ軍中よあり。その輕き素と。き
て甲と。きび護衛の兵よ。この十人を。用ひ。兵上
下。み。服せ。と。い。このは。此と。た。勅と。受て。軍馬と。調
る。と。諸將よ。曰く。今敵の様を伺ふ。吳の勢よ。ま。ま。
たり。荒で。備あり。一攻せめて。打破らん。羊祜笑めて。い。ま。
汝よ。と。吳の陸抗と。尋常の人。あり。と。ま。この。此人。智深
く。計多し。先年吳王の命と。受て。西陵と。攻る。が。歩闡と。

誅して其手の猛將數十人を生捉師と全して國は回
し大將あり。我らとよ及んと敵を。今孫皓よく人と用む。
陸抗があらん間へ我はよく守めて生るとまらう。
其國中に内変あると伺ひ勢ひに乗て破べし。一時
と審りよせざりて。軽く進め敗れ取の道ありと云け
る。諸人持服して境を守り坐して戦ふとあり。羊祜
ある日。諸將と共に獵に出るが。呉の陸抗も同く出たり
と交りて。手下の諸軍をよく戒め。晋の地に獵して。吳乃
境へ一步も入り。やぎり。陸抗と交りて。嘆じて曰
く。羊將軍の勢。紀律をたると。正し。犯さず。くらむとて。た
びは境を越さず。終日獵暮して。本陣へぞ回り。羊祜

る。陣は回り。今日の獵を得たる禽獸を点檢し。もし
呉の獵場より。瘡と被り来て。晋の兵を取らる獸あ
れば。皆呉の陣は送返さし。陸抗その使に對面し。汝が
主の羊將軍酒を好む。ゆゑと問ひ。使は答て曰く。美
酒めと。必を飲ひ。陸抗笑ひて曰く。我は美酒あり。汝は
羊將軍を献り。此へ陸抗が手自造する酒あり。一樽
を送りて。昨日獵に出たる情を表すと。やめんと云ひ。使
酒を持入り。呉の諸將と交りて。怪んで。何ゆゑ敵
酒を送り。と問ひ。陸抗笑ひて。彼を徳と。わだか
ま。我らんと。醉ざらん。とぞや。羊祜が使。晋の陣より入
り。陸抗がいひ。言と告ぐ。酒を献り。羊祜笑て曰く。

羊祜が使晋の陣より入る

彼も亦酒を好むことを知らるうとして、樽を傾けて飲
んと大將陳元といふもの、是を諫ち敵の方より送
る物、その酒に毒あらんといひ、羊祜笑ひて曰く、
陸抗の毒を用ゐる大將、よあらば何の疑とあらんとして、
卒に尺く飲らば、若くは人々を驚く、是より時々使
て通して物と送らるが、或日陸抗が病ある由とき、呉乃使
きたり、酒とた羊祜對面して、汝が主の病も推量
せしめ、我と同ドク、此藥と携りて、陸將軍の及
しやよといひ、羊祜使藥と携へ入りて、陸抗は献る、呉の諸
將怪とありて、羊祜は敵の大將あり、此藥を多と食、毒あ
らんといひ、羊祜陸抗笑ひて曰く、豈人を酖とす、羊祜

子あらんや、必と疑とあらんとして、卒に藥と飲らば、次
の日病なれて平愈せり、呉の諸將喜んで、拜賀し、け
れば陸抗が曰く、彼の専ら徳と施し、我の専ら暴とまは
るは、戦はむとして、自然に服を、志しよく疆と守り、
小利と貪り、辱と取らば、固く守りて戦とある
り、呉主孫皓も、是をみて、戦をせしめて、徒に日を送と
るもの、然るべからば、早くは攻められと催促し、
陸抗
まの使を回し、今戦へ、却て禍を取らん、國を治め、本を強
し、時を待て、戦へしと表と書て、羊祜は孫皓大に怒り、
た、是を陸抗陣中にて、常に敵と内通する由とまき、
果して、此のどとして、陸抗は、官と司馬は、賤し。

孫子兵法卷之五

左將軍孫冀遣荆及攻之。群臣怖れ、
孫皓曰：「孫皓曰：『悪く長し。』建衡と改元し。三
年のち又鳳皇元年と改め、安んず人民を共吉せしむ。上
下怨む。丞相萬或將軍留平。大司農樓玄
三人を以て諫して、市を斬り、或の面の皮を剥取をく
トリちんどりして人を殺し、位を即てする。十余年のあひま
忠臣四十余人を誅し、常は鑑たる。精兵五万と志たぐへ
岑昏と入る。佞人を愛して、クハ、その者の心は任を羊祜
ハ、荆及の境と守りて、陸抗が官と賤せられたる由とまき、今と
そ、吳の滅ぶるとき時されとて、表と上りて、晋帝に奏を。晋帝
ひらたえし、其表を曰く。

先帝西平巴蜀南和吳會庶幾海內殆以得休息而
吳復背信使邊事與夫期運雖天所授其功必因
入而成不二大舉掃滅則兵役無時得息也蜀平
之時天下皆謂吳當并亡自是以未十有三年矣
夫謀之雖多決之欲獨凡以險阻得全者謂其勢
均力敵耳若輕重不齊強弱異勢雖有險阻不
可保也蜀之為國非不險也一夫荷戟萬夫無
當進兵之日曾無藩籬之限乘勝席捲運至成
都漢中諸臣皆烏棲而不敢出非無戰心誠力
不相抗也及劉禪精降詔營保素然俱散今江
淮之險不如劍閣孫皓之暴過於劉禪吳人之

困甚於巴蜀而大晉兵力成盛於往時不于此際
平一四海而更阻兵相守使天下困于征伐經
歷盛衰不可長久也今若引梁益之兵水陸並
下荆及之衆進臨江陵平南豫及直指復口徐
揚青兗並會秣陵以一隅之吳當天下之衆勢
分形散所備皆急巴漢奇兵出其空虛一處傾
壞則上下震蕩雖有智者不能為吳謀矣吳緣
江為國東西數千里所敵者無有寧息孫皓恣
情任意與下多忌將疑于朝士困于野無有保
世之計一定之心平常之日猶懷去就兵臨之
際必有應者終不能齊力致死已可知也其俗

急速不可持久弓弩戟楯不如中國唯有水戰是
其所便一入其境則長江非復所保還趣城池去
長入短非我敵也官軍縣進人有致死之志吳人
內顧各有離散之心如此軍不踰時可必克矣
晉帝之於吳大喜比諸國之軍勢而起吳也伐人
與宣乎其也賈充荀勗亦大諫之曰伐吳之計
且也晉帝又止之曰羊祜之事也長嘆曰天下
の内必有此意也叶の事十の内又七の八あり今天の
與るを取て後うちらば悔あらんとぞやれる其後咸寧四
年に至て羊祜を以て年老て故郷より去りて病と相入りて
請はるに晉帝問て曰く卿いま邦を安んずるの計あらば朕

教よ羊祜答て曰く吳主孫皓惡虐を以て極なり。國中
を怨んで及ぶとよめる。今ゆ攻べ戦へむして吳を
いらん方一孫皓死して別は賢君と立べ如何して吳を
とほん今の時を失ふとらば晋帝げよと悟りて卿ら
為る大将とあつて吳を伐んやと問ふ人ば羊祜曰く臣
い多年老病發て此職を領するに能くも陛下よく智勇乃
人て扱ふ人晋帝あはれと称謝して王者の輦と許して家
暇らし其年の十月は羊祜が病を以て危くありしを
晋帝みづら其家を行幸して病を問ふ人羊祜涙を流
して臣万死も陛下の恩は報するに能くもいひしは晋帝も
涙を流して宣く朕深く卿が吳を伐計を用ひざるをうらむ。

誰う卿が志を継ぐ吳を伐せよ。羊祜が曰く臣は死せんと
を愚誠を尽さんとせんべめらるる右將軍杜預(実も重く
用ゐる)もあなり。陛下ゆ吳を伐むるに必き此人を大将
の人といひも果さずして息絶たり晋帝喜を發して大
輦に乗て宮中へ回る人文武の百官も尽く涙を流して晋
帝勅を下して墓を厚く大傳鉅平侯の封を贈て自ら
大いに祭めい乃ち杜預を鎮南大將軍として荆を
らせらる南國の百姓羊祜が死したるを傳聞て皆市を罷
て悲哀を境と守る吳の勢も尽く涙を流して襄陽の人む
し羊祜が常は岷山にあてびしを思て山の上に廟となして四
時を以て祭る。往來の人々の廟を立たる碑の文を讀ん

呉主孫皓が
 計を以て
 鍛冶の命を
 鎖錐を造る
 の図



呉主孫皓が
 計を以て
 鍛冶の命を
 鎖錐を造る
 の図

呉主孫皓が
 計を以て
 鍛冶の命を
 鎖錐を造る
 の図

決と流さざるといふと無りし世の人あまんと陸決の碑と
ぞ号りける益及の刺史王濬吳の滅びんとするをえて晋
帝は表を上りて伐んとて奏すその表は曰く

孫皓荒淫凶逆宜速征伐若一旦皓死更立賢主則強
敵也臣某作船七年且有打败臣年七十死亡無
日三者一乖則難圖矣願陛下無失事機

晋帝之喜王濬が論よく羊祜が計み合へり朕は意
と決して吳を伐んと宣ひらると侍中王渾練めて申す
吳主孫皓つねは洛陽を以んとする心ありて軍勢を訓練
して界あり今あつと伐んとせば彼が望むるは落んじ
一年も過ぎば吳の勢も疲まざる人其とた虚しの心

伐は一本して功とちひべし晋帝あつとようて又止りなまひ
はと鎮南大將軍杜預荆及より表を上りて今時よ
乗じて吳を伐む由を奏す晋帝あつとて心を決
せば後宮に入て秘書丞張華と碁を囲めり近
臣奏して辺庭より表を上るといひしは晋帝あつと
のふも又杜預が表あり今吳を伐の用意尽く備りて
若中途よしてき置ば孫皓もらば要害を構て守る
し然とた江上の險阻いゝて渡るとはん延利せん
叶はずた由を載たり晋帝いゝせん安索煩ひひけ
まへ張華座を起て碁盤を推ひ謹んで申すハ
下聖武よりて國豊は兵強し今吳の孫皓淫虐より

賢人を殺害し。國を滅びんと欲し。戦はせしめて平ら
し。陛下御心を決して伐り。晋帝は驚き。喜び。卿が
言。あたらしく利害を志す。朕も疑。ところあらんとて。
朝廷は坐して事と議し。鎮南大將軍杜預を大都督と
し。十万余騎を以て。江陵より進ませ。鎮東大將軍司馬
佃を。涿中より出せ。征東大將軍王渾を。油江より。させ。使
建威將軍王戎を。武昌より進ませ。平南將軍胡奮を。復
口より出せ。皆五万余騎を以て。杜預が下。知を交し。又舟
手の大將。龍驤將軍王濬。廣武將軍唐彬。二人二十万
の騎を以て。攻下る。又賈充を。都督とし。黄鉞を以て。寇南將
軍楊清を。副都督とし。襄陽を陣と取て。荊路乃

軍馬を捻叔督とし

王濬計取石頭城

去程は晋の大軍水陸より攻下るは。呉の國は安んずる。
孫皓大にあどるま。群臣はめり。計を議す。丞相張
悝。中郎の車騎將軍伍延を。都督とし。江陵を守ら
せ。驃騎將軍孫歆を。大將とし。復口を守らせ。臣と
り。左將軍沈莹。右將軍慈烏。觀を。具し。十万余騎
を以て。牛渚を固め。諸方の敵を拒ぐ。孫皓は自ら従ひ。
手配を定て。むら。朝を退して。後宮に入。人々
昏問て曰く。陛下顔色いぢ。夏。孫皓が曰く。晋の
大軍水陸より攻きたる。陸路の敵は。要害を

防りしむるは王濬といふもの。枚方の兵船を調て流ま
たがめて攻下る其鋒たるほど鋭なり。此と推べき計は
昏が曰く。臣一門の計あり。王濬が船を尽く。微塵もま
ん。孫皓が曰く。卿いさるる良計。うあが。岑昏が曰く。元より
江南の地の鉄多し。今鉄をのりて長さを枚百丈重二三
十斤の鎖を造せて江の面は是と張又長さを一丈あり乃
錐を造て水の底はひしと立置。敵の船順風に乗しき
なりん。錐はあたりて尽く破れ。又鎖は支らとて飛ぐ
由大江を渡ゆ。孫皓大に喜び急國中の鍛冶を江の辺に
集て日夜を命たを造せて。金の計ありとと思ひ。この
とた晋の大都督杜預へ己は江陵に出て大將周旨とや

く計を授け。汝は舟手の勢八百人を率し。密に小舟の
のりて江を渡り。夜は紛とて樂郷をあたひ山林の間は多く
旗を立て。昼は鉄砲を鳴し。鼓を打。夜は謀を火を焼
烟をあげて。敵の心と疑へし。周旨は周旨は周旨は
江を渡りし。巴山といふ所に埋伏を次の日杜預水陸よ
り進み。且つ呉の大將伍延兵を引て陸路は支へ陸景
舟手と司て先手の大將孫歆一番は進来る。杜預戦ひ
戦て却て退き。孫歆勝る。のりて二十里あり。追ひ
れ。忽ち一色の鉄砲を鳴し。晋の伏兵四方より
の勢は大に乱して。走らる。杜預勢はのりて
討て。枚方を走らる。孫歆残少あり。巴山の城は進入

れ。晋の大將周吉。八百の兵を引いて乱したる吳の勢。ま
どへり。城中へ入て火を付たり。孫歆大よき。どら此所よ
敵めり。飛で江を渡たる。うと。門を開て生んとする。
て周吉。追うけて。一刀も切て落をも。吳の大將陸景。南の牙
兵船を調へ。遙よ巴山。火の起を。味方の勝負。あら
元支し。伺へる。忽然として。山際。松陰より。晋の鎮南
將軍杜預。と書たる旗を。さし出。し。此。い。よ。勝。言。と
冷し。逸。とて。岍。よ。上。ら。んと。する。と。晋の大將張尚馬。と。よ
して。追。ひ。ま。卒。よ。首。を。取。て。は。め。げ。た。ま。べ。残。る。勢。は。十。方。よ
散。乱。せ。り。吳の車騎將軍伍延。の。志。方。の。攻。口。破。ま。た。る。を
て。江。陵。城。を。奔。て。走。り。る。が。晋の伏。勢。よ。生。捉。ま。て。卒。よ

首と刎られり。此より。江陵城破ま。れ。浣。湘。を。打
通て。直。よ。黄。及。進。む。手。よ。ま。へ。る。もの。も。ち。郡。守。縣。官
い。よ。戦。へ。さ。る。ま。た。風。を。望。ん。で。降。人。と。ち。る。杜。預。一。百。姓
を。安。ん。ど。て。秋。毫。も。犯。さ。さ。と。さ。く。武。昌。城。よ。攻。め。ら。れ。一。支
ゆ。せ。で。皆。門。を。開。て。降。と。こ。ま。す。と。す。り。軍。威。四。方。よ。振。て。吹
風。の。草。と。ま。び。う。の。ど。く。さ。り。り。と。建。業。と。取。の。計。と。羨。と。る
よ。平。南。將。軍。胡。奮。が。曰。く。吳。は。百。年。の。仇。根。深。し。て。尽。く。服
ま。ど。ら。ら。ぬ。殊。よ。春。水。漲。来。て。く。く。雷。と。と。ゆる。は。ま。ら
く。軍。を。収。め。冬。よ。至。り。て。又。進。と。も。人。杜。預。が。曰。く。む。し。樂。毅
濟。西。の。一。戦。よ。齊。の。國。の。強。を。破。る。今。味。方。威。風。大。よ。振。て。破
破。竹。の。と。し。数。節。の。ち。皆。又。と。迎。て。解。ん。手。と。着。る。不。あ。

晉書 卷之四十一 地理志 荆湘 江陵 杜預 孫歆 陸景 張尚馬 胡奮 樂毅 破竹 數節 皆又 迎 解 手 着 不 矣

下はとて大軍と近て。建業は攻め舟手の大將龍驤
 將軍王濬は数万の兵船を連袂流し来たがため下りる。吳
 の勢がさると推へきやうなり。降人は出るもの故と云らば
 とて先手より。報じて吳の勢が水中に鉄の錐と立長き
 鎖を張て待たけたり。輕く進め味方の舟はよくやぶ
 るんと告りよ。王濬は笑ひ何程の事う。あらんとて大
 なる筏を多造らせ草で束て人形を拵へ弓箭兵杖を持
 せて後へ筏のせ水は順めて真先は流しつけたりければ
 吳の勢がよとの人ちうと。ちひ我をたんと逃まる水は急ぐ
 水中に立たる錐はよく筏はよく引取て流しはれれば又水
 とはなる兵を扱んで筏のせ長き十丈めまうの大火炬と

造て油をそぎ鎖を張たるをどよまびくしく投下し
 る。水面の鉄索はよく断て。さきより路はけらる。王
 濬が大軍なち進んでむるも勝をとりよと云。吳の丞相張
 悌は牛渚を守りて居たり。敵をたてて攻め近付と云てま
 の沈堂。諸葛靚二人を生じて戦ひ沈堂をもち。諸葛靚は
 舟をたてて攻めたり。只よく力と尽して此要害をたて支
 へ。あを去て江を渡り。不幸なりと打負るとな。國必
 と滅ぶ。諸葛靚が曰く。さき實は某が心は叶へり。兵
 の手配をさるるも早馬きたりて。晋の舟手の勢は流し順
 て攻下る勢は。ちへど大なりと。味方よく破たりと。告げ

れ。二人色を失ひ急ぎをせ回て丞相張悝を見へ國已
よめ争う。早く晋は降らんといひる。張悝は國
家よきを滅びん。賢愚を共と共と。今も君臣と
とぐく降らん。一人も國の為は死するものあら。是れ
羞むらばや。詔書觀が曰く存亡は天の數。丞相
一人の思召も甲斐あるは。何故は。死を
求むるや。張悝涙をちりて曰く。今日も死を
る日あり。我切より此國の祿を食て位をて。丞相の
より國滅び。我も共亡びん。人ぞ命を惜ん。不
義の名を取んや。といひる。詔書觀も涙をおきて去
り。張悝乃ち沈堂を伴ひ討殘す。絶の勢を

進み。晋の大軍四方より追取。周吉張尚と云
大将と討取んと切て。張悝力を奮て。散
戦ひ。卒は乱軍の中。死る。沈堂も周吉も討て。殘
る勢。四方に散て。落行。牛渚を破れ。王濬
洛陽へ人を上せて。捷軍を奏問。晋帝は喜
び。賈充や。吳の平。殊。暑氣
の時。及んで。中國の勢。深く。吳の境。入ら
る。疫疾を發。暫く軍を収め。時を待て。討
ぬ。滿坐の朝臣。賈充。萬全の討。秦
の。張華。一人争ひ。諫。今官軍を
の。巢。深。吳の軍民。孫皓。擒

せんとい一月の内を生じけり。陛下下ぬ。固く御心を決した
ぬ。ごんべ徒らも前功を廢せし。賈充怒てや。御
天の時を省ぎ。地の利を審り。せせご。安兵をさめて。天
下の人馬を苦ぢんと。首を斬ても厭とる。晋帝笑ひて。
宣ひ。汝をよとして怒て。發さる。朕心も張華も。何
ぞ争て。用ひんと。たは鎮南將軍杜預。表を上ると。奏し
る。近臣ひつた。読ま。今。兵を進めて。呉を滅ぼさん。
此と。たを失べ。くらと。書たり。晋帝。よく御心を決し。
勅を下し。速く根を絶ぎ。由を告る。ひく。杜預王濬
大に喜び。水陸とも進んで。其勢ひ風雷のぞ。呉主孫
皓。六の由を。震ひ。怖と。今。諸方の攻口。を破して。諸大

將。尽く討死せり。い。せん。と。哭き。殿中護衛。乃
勢。收。百人頭。を叩て。や。北國の敵軍。深く國の
境。入。味方の軍民。た。降。あ。の禍。乃
真。の。人。昏。が。説。暴。ち。り。て。大將。由。士卒。も。怒
み。を。含。む。ゆ。あり。初。ぐ。早。く。今。昏。を。殺。した。是。某
ホ。命。と。せ。て。敵。に。當。らん。孫。皓。が。曰。く。量。よ。今。昏。を。ど
の内。官。い。う。で。國。を。乱。る。と。あ。らん。諸。人。と。言。曰。く。陛下
ち。う。で。蜀。の。黃。皓。を。人。の。い。も。や。孫。皓。が。曰。く。ま。ら。ん。此
者。の。一。命。を。助。け。官。を。刺。で。奴。と。ま。さん。諸。人。耳。よ。も。ま。り
入。と。宮。中。に。打。入。て。今。昏。を。ひ。ま。さ。れ。その。肉。を。一。口。も
食。て。快。ひ。ま。と。喜。ぶ。此。よ。お。ひ。て。大將。陶。潛。ホ。や。ら。る。臣



司馬炎
天下
統
民無
為
平
大
圖



船がへつち。舟手の勢二万人を率し。大船よのりて敵とやぶらん。孫皓志くたへして。御林の軍を調へて。陶潛とて率して。前將軍張象と一手に分きて。水まざるのぶる。俄に西北の風吹て。旗を立てまきりもあつて。波浪天を拍て。える。臆冷まどりり。船百艘の兵船とま行方ちく吹ちりさきて。只張象が舟をくり。敵十人よて残りり。晋の大將王濬も兵船を連糸帆をよつて。進りり。象が三山をさぐ象あつて。波あらく。風をげまて。水手揮取あつて。まき此体よて。渡りぐじ。斬り風を志す。まのべしと。義しり。王濬剣を抜て。怒り。我い多目の前。石頭城を取んと。如何。あつり。追手の風。船を

とむ。象とやめ。象命は背く。斬てまて。卒に鼓撃して。大に進む。呉の勢あつて。叶とやあつ。戦ひる。前將軍張象。盛と卸せ。降人となる。王濬對面して。中り。味方とあつ。先手よ。城を破り。張象とあつ。手勢を打て。真先よ。直ちよ。石頭城よ。行て。門をひらけ。よ。つり。内よ。味方入りぬ。門を開き。晋の大軍。乱と入り。火をうけ。吶の言をあげ。呉の勢拒ぐ。力あつ。降人となる。吳主孫皓。首を刎んと。中書令胡冲。光祿勳薛瑩。安樂公劉禪。身を保ちぬ。

孫皓は自ら従ひ遂に輿櫬を備へて君臣ともに自縛して降人に出らるべし王濬は自ら請取てその繩をときもる國中の凶籍を納て呉の四及四十三郡三百十三縣家數五十二万三千軍吏三万二千軍兵二十三萬男女老少二百三十万米穀二百八十万石兵船五十余艘後宮の美女五千余人尽く王濬が手は屬もるりりルと陶濬が勢も戦ひ破る次の日陸路の寄手鎮東將軍司馬佃建威將軍王戎亦尽く来ぬのまり翌日杜預又来り大に諸軍を賞し倉を發て百姓を賑ふるは呉の軍民も安堵して平定せり呉の建平の太守吳彦の城を守りていつか攻むとも落ざりし

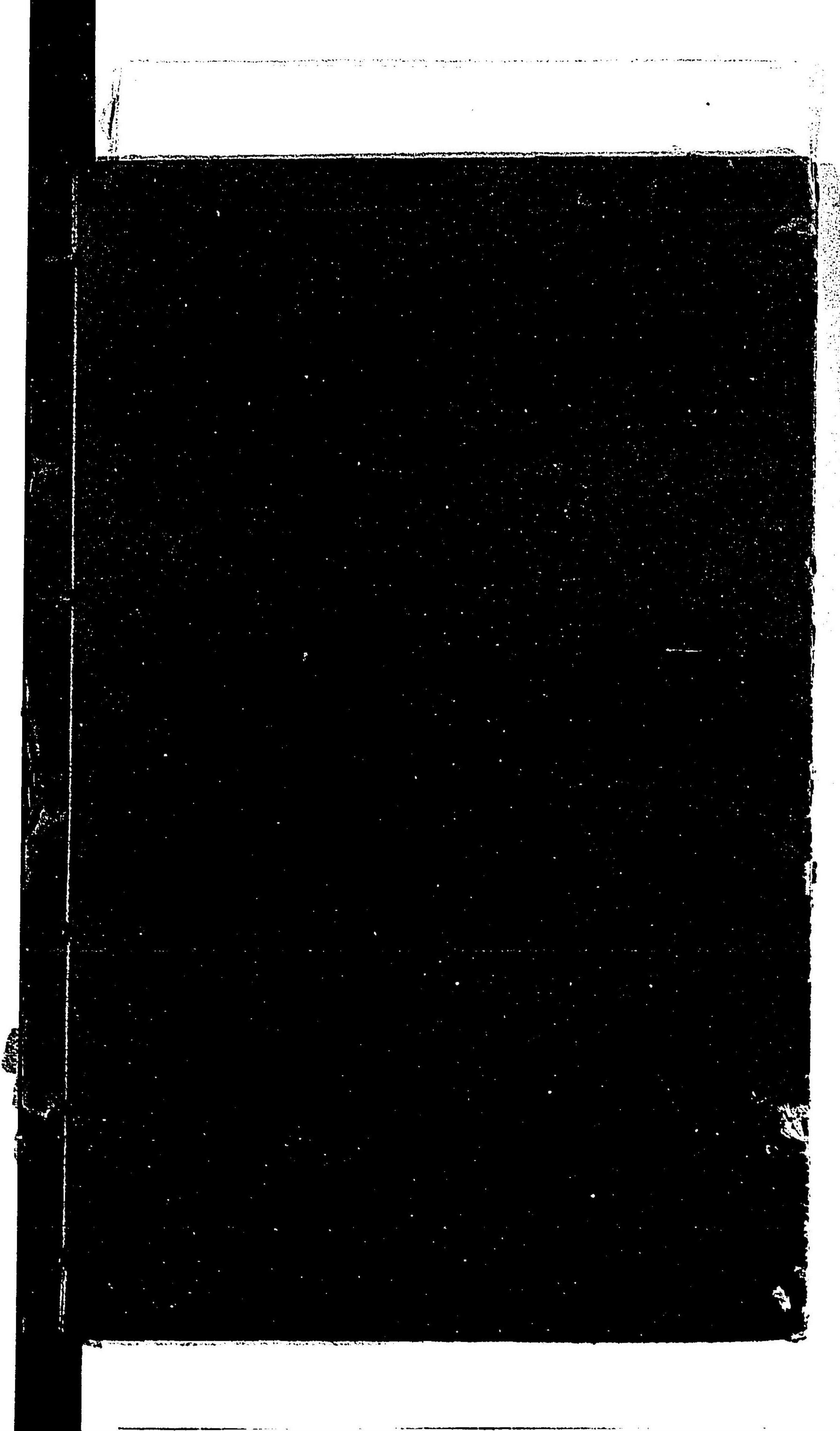
國の滅びたるをみて城を出て降る王濬の忠義を感し天子は奏して金城の太守とも晋帝は乃滅びたる由て文を群臣と賀せば不益をあげて宣ひける此も羊祜が力あり惜むらくは直に呉の滅びたるをえせしむざるもして涙を流し人々群臣も黙然たり吳の驃騎將軍孫秀の國の滅びるとして南を望ぐ大に哭き昔討逆將軍孫堅年壯るとは纒ある校尉の職より此國を開て王業を創りひて今孫皓尽く是を廢悠々蒼天此何人哉といひて涙を流し時大康元年夏五月江南尽く定り王濬師を収て洛陽へ回り孫皓を引て天子を見しむ晋帝坐を賜て朕の座を設て卿を

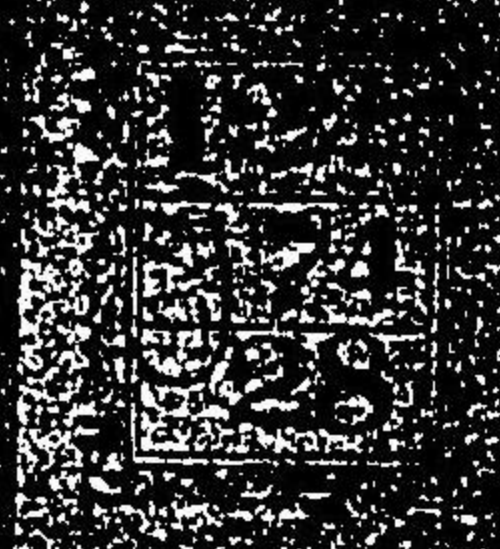
待てとくると宣ひるに孫皓答て中らるる臣も南方に於て此座を殺して陛下を待てとくると晋帝大に笑ひて曰く賈充傍にありて問て曰く孫皓吳にありて人の面を剥めりて眼をくると如何ある罪ぞ此の如く討つる者も皆此の如く刑を用ひて君を弑し奸佞より不赤面をも晋帝酒宴を設けて吳の君臣をりては孫皓を命公に封じて其子孫封を中郎に任し丞相張悌が忠義に死したると憐れんで其子孫を重く賞し王濬を輔国大將軍に封じ其餘の將士亦く恩賞ありて天下大に定る蜀主劉禪晋の太康七年に薨じ魏主曹奐太

康元年に薨じ吳主孫皓太康四年に薨じ此より三國晋帝に叙して司馬炎一統の天下となりて人民無為の化に服し四海初て太平を樂むことと目出度し。

繪本通俗三國志八篇卷之五大尾

122
74
08





繪本通俗三國志

八編五

止